

# 会員の ひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

## 診療・診察ガイドラインは ありがたい

函館市医師会  
亀田花園病院

まつもと よしたか  
松本 佳隆

大学医局人事の枠から飛び出し民間病院において一般医師として勤めるようになり、早、10数年が経過しようとしている。時折、専門医での知識を使いながら診断・治療をすることもあるが、それ以上に一般医師（一般内科）としての仕事が圧倒的に多い。現在のように研修医期＋専攻医期を経て専門医になるのと違って、いきなり専門分野に入局する形態が一般的であった大学卒業後30年くらいの医師にとっては、個人的にローテーション研修でもしていなければ他科の領域については馴染みがなく経験しようにもその体制はない。

民間病院で一般医師として働く以上、他科（特に内科全般）の経験はほとんど無いが、とにかく知識だけでもなんとかしようということで、日本医師会雑誌の生涯教育シリーズを愛読している。その中でよく引用されているのが、それぞれの科の学会で発表されている診療・診察ガイドラインである。もちろん全ての疾患や治療が網羅されているわけではないし、ネットで一般公開されていない内容もあるが（学会員にならないと閲覧が不可のものもある…）、公表されているガイドラインに関しては、日常診療・治療の道標になっていると感じており実際に利用している。

20年くらい前に自治体病院で働いていた時、大先輩の医師に「ガイドラインは所詮ガイドラインに過ぎず、専門医たるもの自分の治療は自分の経験と実績に基づいて行っものだ」と言われ、それも一理あるかなと思ったものである。しかし、広範囲な診療を求められる一般内科医にとっては、全ての分野の専門医的な経験と実践を得るのは不可能であり、その治療が患者にとって有益性を保つためには、各科の診療ガイドラインが頼みの綱である。今後とも家庭医向けの診療・診察のガイドラインの作成とアップデートを期待している。

## 我が家にもインバウンド

苫小牧市医師会  
あつまクリニック

くれ けんいち  
呉 賢一

2023年5月に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行したこともあり、最近のインバウンドの急激な増加は様々なところで実感するようになっていく。都市部である札幌市内は勿論のこと、出張先で乗車する地方への特急列車においても、自由席では少し遅れて乗車してしまうと、ほぼ満席で座れないほど、英語・中国語・韓国語・タイ語・ベトナム語・インドネシア語など様々な言語が飛び交っている。

そんな中、昨年末に我が家にもインバウンドがやってきた。と言ってしまうと語弊があるが、私の母のいとこの娘（またいとこ）夫婦がはるばるニューヨークから来道した。ニューヨーク→シンガポール→沖縄→九州→北海道→台湾→ニューヨークという日程を約2週間で周遊する旅行の一環で、北海道には3泊4日滞在してくれた。またいとこの実家はニュージャージー州にあり、私が約20年前にアメリカ留学していた際の夏季休暇時に、日本に帰らず英語習得のため長期滞在をさせてもらい大変お世話になっていた。今回はそれ以来の再会で、事前に温泉と刺身とスキーが好きということを知っていたので、それを元に道内滞在中の日程を組んだ。

私もまたいとこも台湾にルーツがあり、細かい話になるが、それぞれ台湾系日本人、台湾系アメリカ人といえる。台湾人は基本的に日本のことが何でも好きで受けがよく、またいこに関しては特段心配しておらず、夫が白人なので温泉や生魚に多少は抵抗ないだろうかという心配があったが、それも杞憂に終わった。男風呂に掃除する女性が普通に入ってくるのは気にしていた（確かにその感覚は正しい）が、刺身に関しては「akami」「chutoro」「otoro」とマグロの分類まで知っていた。

北海道へ来る前までに言葉で困らなかったか聞いたが、翻訳アプリを使いこなしてどうにかなったと聞いて、今は本当に便利になったなどと改めて実感した。私が留学していた当時は、常に電子辞書を持ち歩いて、わからない単語に出くわす度に、打ち込んだり打ち込んでもらったりしていた頃が懐かしい思い出である。支払いに関しても、アメリカは20年前もカード社会であったが日本は当時そこまでない記憶があり、今でこそキャッシュレス化が進みインバウンドもスムーズに観光ができていそうである。パンデミックの数少ない良い側面が出たのではなかろうか。

最後に、Netflixを観ている話題になり、何が面白かったかと聞いたら日本の番組の“Old Enough”と言われ、絶妙な翻訳に感心した（笑）。

# 摂食の尊厳 ——咽頭麻痺を考える

札幌市医師会

はまじま いづみ  
浜島 泉

聞きなれないことばであるが、球麻痺のことである。この状態の時は、誤嚥を防止するため経口摂食禁止というのが常識である。しかし、これを克服する方法を提案したい、と同時に、さしせまって、気になることもあるので、それも訴えたい。

簡単に言ってしまうと、誤嚥を防ぎながら経口摂食することであり、方策というのは、喀出または自力吸引できないときは気管切開することである。気管切開をすれば、呼吸は、ここから可能なので、咽頭に停滞するものは、流動物で流しこむ、というものである。

気管カニューレには、いくつか種類があるが、カフ付き（ダブルチューブ）カニューレがおすすめ。

この方法には、メリットとデメリットがあるので、患者さんに勧める場合には、詳しい説明が必要である。誤嚥性肺炎を経験した人でも、肺炎が短期で治癒すれば深刻に受け止めない人がいるかも知れない。しかし、咽頭麻痺の不快感を実感していることも考慮し、誤嚥性肺炎の危険をも訴えて説得してほしい。メリットは、し好品を経口摂食できることである。経管栄養では味わえない味と噛み応えと食物の温度、香りが実感できることである。（図）

デメリットは会話に不自由することである。会話をするときには、内筒を抜くか、カニューレを抜いて口から呼吸できるようにすれば、声帯は働く。摂食中であれば、筆談もできる。複雑な仕組みになっているので、深く理解することが必要である。

職員の研修も大切である。経口摂食中は見守りをする必要がある。経管栄養のようにつなぎっぱなしにしては、不測のトラブルを防げない。摂食終了後に口腔内の残渣を確認する必要がある。内筒をはずして、咳をすることで確かめる。必要ならサクションする。それと、食事時間以外でも、摂食するときは、カフを充満することである。咽頭・喉頭の解剖生理学を履修した従事者にも改めて学習してもらおうとよい。

私が、このことを提案するには、私の経験がある。私は昭和40年代、50年代に脳神経外科の医師をしており、第4脳室腫瘍を摘出したときに、球麻痺（誤嚥）が単独で出現して、この方法を実施したことがある。会話も書字も歩行も可能であった。気管カニューレには、外筒と内筒のある複管カニューレ（カフ付きカニューレ）を使用したので、食事が終われば、会話が可能であった。

このシステムの適応は、意識、経口摂食意欲が保たれていることが必要条件である。喀痰の喀出ができる

となおよい。経管栄養を行っている人でも、条件がそろえば移行できる。拒食の患者は非適応である。診療内容の説明を受け止め、同意することが必要である。

適応をきめ説得する際には、嚥下カテストを行うとよい。流動性の造影剤では、嚥下できてしまうため、流動性の造影剤を、パンくずに浸したもので検査してみしてほしい。その後に、流動物で流し込んで追跡撮影してはどうか。

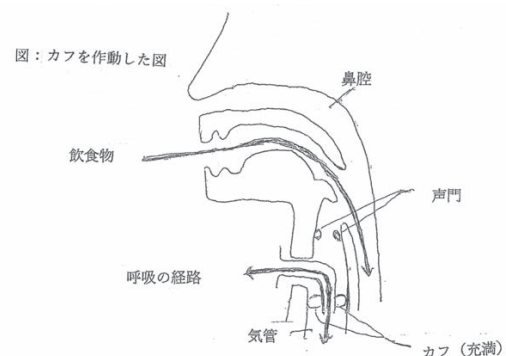
なぜ私が心配しているかということ、私は45歳の時に後下小脳動脈瘤でウォレンベルグ症候群となった。軽度だったので、さほど不自由はなかったのであるが、近年それが進行して、食べ物によっては、咽頭に停滞するので口腔内へ引き戻す、飲み物で流し込む、ということを行なっている。どのような物が停滞するかというと、パン、カステラ、せんべい、焼きざかな、かぼちゃ、じゃがいも、かずのこ、ブロッコリー、錠剤、などである。喀痰、咳込み、くしゃみなど、時にはむせるなども進んでいる。現在のところは、危険は回避されているが、風邪で咽頭炎を起こしたときに、最悪の事態になるのではないかと、恐れたことがあった。

私が、何人かの医療関係者に、この状態が進行した患者さんについて相談したところ、経験がない、ほかでもやっていない、経管栄養の方が危険を回避できる、気管切開すれば、会話ができなくなってしまう、病巣でないところにメスを入れるのはどうも、と言って尻込みする反応が多かった。

したがって、今回、この投稿をするにあたっては、私自身の障害が進行した時点で、引受けてくれる先を求める期待もある。

適応は狭く、時期も限定的かもしれない。選択肢として提示しても拒否されるかもしれない。しかし、脳血管障害や仮性球麻痺などでも適応になるケースがあるかも知れないので、人生会議ACP（終末医療の期待）に提示し、終末期の満足度のために医療の力量を拡大する選択肢としていただきたいと思い、問題提起することにした。

医療者が、患者の福祉、尊厳の維持に、十分取り組んでほしい。医学を精一杯活用して、最期の見えた患者にも、希望をもって暮らせるようにしてほしいのである。適応を設定するために、嚥下機能評価の進化が求められるかも知れない。



# ハイドンと中山晋平

函館市医師会

みづせき  
水関

きよし  
清

午前中の外来が延びて、やっと遅い昼食にありついたある日の午後、スイッチを入れたエフエム放送から流れ出した曲は、「タン・タン！タ・タ・タン！」と軽快なリズムで始まった。その20秒後にもまた、「タン・タン！タ・タ・タン！」、さらに1分半後にも同様なメロディが流れたが、今度は「ショ・ショ！ショジョジ！」と聞こえる。その20秒後にも同じメロディが続いたが、確信をもって「證 證 證城寺」の文字が脳裏に浮かび上がった。このフレーズは、さらにその2分半後にも繰り返された後、楽章の切れ目の小休止に至った。

のちに判ったことだが、四楽章からなるこの曲は、ハイドン（1732-1809）が1787年に完成させた交響曲第89番へ長調・古くからの愛称は『W字』で、全体で20分弱の曲と知れた。私が惹き付けられたのは、6分余の第一楽章で、序奏を置かず、「證 證 證城寺」と聞こえる2小節の分散和音が、いきなり「フォルテ」でバイオリン演奏される。なお、第一楽章全体では、序盤に4度・終盤に1度の計5回、このフレーズが繰り返される。

言うまでもなく、「證 證 證城寺」で始まる童謡は、「證城寺の狸囃」である。児童雑誌『金の星』1924（大正13）年12月号に野口雨情（1882-1945）が発表した詞に、中山晋平（1887-1952）が曲をつけて、同誌の1925（大正14）年1月号に発表したと伝えられる。その際、晋平が雨情の詞の一部を改変したことについて、野口に連絡を取ろうとしたが、当時、旅行中だったため果たせず、『金の星』主宰・齋藤佐次郎の独断で掲載されたと伝えられる。

野口雨情・作の「證城寺の狸囃」の詞をみておく。「證城寺の庭は／月夜だ 月夜だ／友達来い 己等（おいら）の友達ア／どんどこどん。負けるな 負けるな／和尚さんに負けるな／友達来い。

（以下、略）」

一方、中山晋平の曲では、以下のように歌詞が部分的に改変され、出だしに同じ音を繰り返すことで、リズムカルで軽快な曲想になっている。

「證、證、證城寺／證城寺の庭は／ツ、ツ、月夜だ 皆（みんな）出て来い来い来い 己等（おいら）の友達ア／ぼんぼこぼんのぼん 負けるな 負けるな／和尚さんに負けるな 来い、来い、来い来い来い来い／皆出て、来い来い来い

（以下、略）」

そもそも狸囃子とは、『分福茶釜』『八百八狸物語』と並ぶ「日本三大狸伝説」の1つで、雨情は、千葉県木更津市の證誠寺に伝わる「狸囃子伝説」に想を得たものといわれる。以下に、伝説の概要を示す。

昔、「鈴森」と呼ばれていた證誠寺の辺りは昼なお暗く、夜には妖怪が現れると噂される所だったが、新しくやって来た和尚は、妖怪をみても全く驚かなかった。妖怪たちの正体は、森に住む狸だったが、親格の大狸は、この和尚さんの平然ぶりが癪にさわり、「ぜひと和尚を驚かせてやろう」として、ある企みを仕掛ける。秋の夜、何者かが大騒ぎすることに気づいた和尚が寺の庭を覗くと、大狸が腹を叩いてポンポコと調子を取り、それを囲むように何十匹もの狸が楽しそうに唄い踊っていた。お囃子のようなそれを見て、和尚も自慢の三味線を持って思わず庭に出て対抗し、まるで和尚と狸の音曲合戦のようになってしまった。それから毎晩、和尚と狸たちは唄い踊っていたが、4日目の晩、狸たちは現れなかった。和尚は翌朝、調子を取っていた大狸が庭で腹を破って死んでいたことに気づき、その亡骸をねんごろに弔った。

雨情が「證城寺の狸囃」を掲載した『金の星』の前身は、島崎藤村・有島生馬監修によって1919（大正8）年に創刊された『金の船』。前年の1918（大正7）年には鈴木三重吉によって『赤い鳥』が創刊され、翌年の1920（大正9）年には、西條八十が選者となって『童話』が創刊されるという、大正時代の童話文化が開花した時期にあたる。「こどもの幸せは大人の幸せ」を合言葉に、それまでの「わらべ唄」とは一線を画して、西洋のマザーグースに対抗できるような「童謡」を、北原白秋、西條八十、野口雨情ら、当時一流の作家が筆を執り、「言葉を駆使して絵を描く」ことを意図した。とくに白秋は、『赤い鳥』の1920年1月号に、「柱時計」（原題：Hickory Dickory Dock）と「緑のお家（うち）」（原題：There Was a Little Green House）を掲載したことを皮切りに、マザーグースの童謡を続けて同誌に発表し、ついに1921年（大正10年）末には、訳詩集『まざあ・ぐうす』として纏めたほどの力の入れようであった。

子供向けの文学的な作品・詩であることから、当初の「童謡」にメロディはついていなかったが、『赤い鳥』1918年11月号に掲載された西條八十の童謡詩『かなりや』に、作曲家の成田為三が旋律を付けた楽譜を載せたことが大きな反響を呼んで以降、童謡は音楽と密接に結びつくようになった。

「證城寺の狸囃」に戻ると、新しい童謡の創作に対する雨情の情熱に共感した晋平は、【ゆたかな個性と愛情が子どもの心を熱くつつむ】という考えのもとで、「子どもの心に帰れる歌とリズム」を目指した。確かに、雨情の詞を曲付きに改変する過程で、「證城寺」と「月夜」の前に、語頭の一文字を追加することで歌い出しのリズムを整え、文末の「来い」を繰り返すことで、歌い終わりの切れをよくしている。さらに、「どんどこどん」という太鼓本来の音色を、「ぼんぼこぼんのぼん」と、狸の腹鼓に擬した軽快なものにしたことで、「狸囃」という、表題を強く印象づけることにも成功している。

19世紀に長野県で生まれた中山晋平が編んだ童謡と、18世紀にオーストリアで生まれたハイドンが組み立てた交響曲。100年以上の時空の隔たりをものとしめない、驚くべき類似である。

## 趣味の川柳

札幌市医師会

しばた むつお  
柴田 睦郎

道医報一月号の北海道医歌人会詠草を読ませていただきました。道内各地の歌人の先生からの一句立て短歌の連作でそれぞれ題名付きでした。会として活発に活動されている点敬服し、つくづく羨ましいと思いました。

私の趣味である川柳は愛好家の高齢化で道内の吟社が続々と休会、解散しています。私自身は「川柳きやり吟社」という東京の伝統川柳（定型遵守、日常茶飯を口調の良い明るい川柳で詠むが社是）の吟社の同人（社人）です。この吟社は来年が創立百五年と古い歴史を誇ります。かつて社人は百人限定と謳っていたのですが高齢のため退会する社人が多く、会員も高齢のため補充もままならず、現在社人は七十人台に減っています。

対して短歌は昨年口語短歌の確立で紫綬褒章を受章した俵万智さんを代表に若い作家が続々と登場しています。新聞の日曜版を見ても俳句と並んで短歌のコーナーは依然として充実しています。文芸欄には評論（俳論、歌論）が掲載されても川柳の評論などは掲載されません。短歌・俳句はテレビ番組もあり総合雑誌の発行は勿論ですが句集、歌集の刊行も盛んですし結社の活動も盛んです。我が川柳はNHKラジオの文芸選評からもいつの間にか姿を消しました。

時事川柳や万柳は常連も多く、企業の公募川柳（いわゆるサラリーマン川柳など）の応募者数などをみると川柳は衰退傾向にはないように見えます。しかし文芸としての吟社川柳は衰退の方向にあると悲観しています。

ただ定型短詩として短歌の構造575(上の句)77(下の句)をよく見ると長歌の反歌としての位置づけとは別に連歌(句)、俳諧の前句(77)に附句(575)するという川柳の成り立ちに関連する構造が見えてきました。そもそも川柳という文芸ジャンル(575)の名称は俳諧の習得手段である前句付け(77の前句に続く句を作る)の宗匠である柄井川柳の名前に由来するのです。

俳句と川柳の違いは挨拶の句である俳(諧の発)句(575)が季語や切れ字を含むのに対して平句の川柳(575)には季語や切れ字は必要としないという点があります。別に武玉川という名前の定型短詩(77)もあり時には川柳に含めることがあります。武玉川の実例は「取り付きやすい 方へ相談」「二つ重なる ささやきの傘」などという物です。

今後も歌人の諸先生の作品を熟読玩味して文芸としての川柳を磨きたいと考えています。

## ダンシング・オールナイト

恵庭市医師会  
恵み野病院

はしもと ひろし  
橋本 博

新しい年が始まりましたが、特に変化もなく、平穏な日々を過ごしています。ただ体力と記憶力の衰えは、しばしば自覚するところで、時に不安にもなります。最近、同世代の有名人の訃報が多く、その不安を助長する要因ともなっています。もんたよしのり72歳、大橋純子73歳、八代亜紀73歳、谷村新司74歳……。私は昭和30年生まれ、今年の誕生日で満69歳になりますので、彼ら、彼女らは、いずれも私より若干年上ですが、同世代の愛着を感じます。きっとこの人達の歌に大きな魅力を感じながら過ごして来たからでしょう。

いわゆる長寿社会で、80台くらいまで、生きていられそうな気がしてしましますが、(きわめて当たり前のことですが)平均寿命で一斉に逝ってしまうわけではなく、私の年代くらいから90歳ころまで、少しずつ他界し、その結果の平均寿命なのだ、あらためて感じる次第です。

今の若い方は、「ディスコ」と言う言葉をご存じないかも知れませんが、1970年～1980年代前半くらいに全盛期を迎えた、ダンスホールに近い存在がありました。生バンドではなく、レコード演奏でアップテンポな曲や静かな曲を流し、ウィスキーの水割りを片手に、静かに曲を聴いたり、時に踊ったりしたものです。もんたよしのりの「ダンシング・オールナイト」が今も耳の奥に響きます。さてあと何年生きられるか、全くわかりませんが、人の記憶の片隅に、少しでも残るような生き方をしたいと思う、今日この頃です。

写真は、最近手に入れたゴッホの「ひまわり」のレプリカです。以前から好きな絵のひとつで、先日東京のSOMPO美術館で手に入れ、仕事場の机の横に飾っています。15輪のひまわりは、キリストの12使徒、盟友のゴーギャン、弟のテオ、そしてゴッホ自身を現わしているのだそうです。



# 「善と悪のパラドックス」： ホミニン人類進化からの一考察

函館市医師会  
函館五稜郭病院

なかた      ともあき  
中田      智明

肥満パラドックス、フレンチパラドックス、高血圧パラドックスは臨床医学でも有名であるが、ここでは「善と悪のパラドックス」を取り上げたい。

毎日のように無慈悲に隣国に対して残虐な行為を命令している指導者が、翌朝には神に向かって敬虔に祈りを捧げていた。偽善なのか、両者が併存する「善と悪のパラドックス」なのか、と頭に浮かんできた。10世紀に遡るキエフ・ルーシにルーツを持つウクライナに対する戦争は、まさに尊属殺人に匹敵するようにみえる。ハーバード大学人類学者のリチャード・ランガムは、その著書「善と悪のパラドックス」(原題は The Goodness Paradox)のなかで、ホミニンは人類進化の過程で直立二足歩行獲得からホモ・サピエンスに至る詳細な化石の分析を行っている。そして、ホミニン進化の過程で、他者に対する攻撃性・食料争奪戦と仲間に対する融和性・共存という「善と悪のパラドックス」を明らかにしてきた。肉親・同族者への愛情、歩くことが困難な傷病者の介助(当時、基本的に歩けないことは死を意味した)、死者への敬虔な祈り・埋葬、こうした精神性・社会性の進化が人類化石に刻印され解明されてきた。

一方、飢餓との戦い、厳しい生存競争、野生の捕食者や敵対的ホミニン同士の殺戮も延々と繰り返されてきた。卵生生物と異なり、胎生の哺乳類はおしなべて我が子に深い愛情を尽くすが、他者、他種に対しては冷酷だそう。類人猿と我らが祖先のホミニンは600万年前に別れ、さらに20万年前アフリカでホモ・エレクトスとの共通の祖先から分岐して、我ら現生人類ホモ・サピエンスが誕生したことを、最新の分子生物学が詳細に解き明かした。この約580万年間の進化の過程で、「善と悪のパラドックス」がいまだ克服できていないのはなぜであろうか？ホモ・サピエンスも生物である以上、食料の獲得のためにはその運命(原罪?)からは逃れられない。そもそも捕食は生物(動物)の必然悪である、生物学的進化(遺伝子変異)に善悪の判断は規定され得ない、ためであろうか？あるいは人類は殺戮・戦争の歴史を学びながらも、まだまだ進化しえない、その途中、理性・精神性の発達段階にあるからなのか？ちなみに同じ類人猿同士で、現時点でその進化の頂点にあるチンパンジーとボノボでは違うらしい。同族他者に対して、前者は凶暴性・防衛意識が強く、後者は融和性・協調性が高い、といわれている。

その理由は正確には未解明ながら、環境の豊かさ(安全性や食料調達の容易さ)が影響しているらしい。遺伝子的優位性はないにもかかわらず、同じホモ・サピエンス同士で肌の色、言語、宗教・歴史・文化、生活習慣の違いを半ば根拠に未だに横行する優越意識と差別、阻害と殺戮がなくなる。しかし、これは「どの個体(一人の人間)にも、善と悪の可能性が備わっている」(R・ランガム)ためらしい。定説ではあるが、直立二足歩行が脊椎全体で重力に抗して大きく発達できるよう脳を支え、進化をもたらしたといわれている。さらに重要なことは、直立二足のおかげで、四足時代に比し約2倍以上に視界が開けたこと。これは、ハイハイから一人立ちを達成した後の幼児の脳の発達と軌を一にしている。四足より二足は捕食者から逃げるのは遅いが、高く広く確保された視野により情報量が格段に多くなり、前頭葉の進化とともに敵や危険を早く察知し、豊富な水・食料・安全な住処を見つけやすくなった。このような知識の獲得、飢餓リスクの低減と栄養状態の改善は体格そして脳の発達をさらに加速した。直立二足歩行で視野が広がり、より豊かで安全な外の世界への知的好奇心も強化された。数百万年にわたる旅をしてきた人類化石の解析から、幼子・老人あるいは怪我人を伴って危険性の高い旅路を、集団で共感と助け合いをもって移動する姿が証明されている。そして約5万年前には、いよいよ出アフリカが実現した。その後の西アジアを経由した世界進出の旅は、近年のミトコンドリアDNA分析によりその詳細が明らかになってきた。

ちなみに、旅行好き、高い所に登りたがるのも、そうした現生人類の視覚的刺激と知性好奇心をくすぐる脳の進化の仕業らしい。こうしてみると、ルソー派や孟子の生来平和的・性善説やトマス・ホプス派や荀子の生来暴力的・性悪説のように、ヒトを単純な二項対立では説明できないように思われる。善と悪のパラドックスは長い人類進化や生存競争を勝ち抜く必然悪・原動力であったかもしれない。現代に生きるホモ・サピエンスとしては、「善と悪のパラドックス」への向き合い方として、人類学的科学的視点に加え、社会・歴史・文化に関する豊かな多様性と大きな寛容性を備えた物の見方が、今後の脳の進化を待つまでもなく、必要に思われる。そんなことをつらつら考えながら、今日もウクライナの人々の平和を願っている。

## 阪神タイガースと寿命

苫小牧市医師会  
あびら追分クリニック

かなもと  
**金本** はじめ  
一

今年もプロ野球が開幕しました。野球ファンにとって、今が一番楽しい時期です。皆さんの最良チームは開幕ダッシュに成功したでしょうか？

私は生まれも育ちも大阪です。地元ローカルテレビ局では試合開始から終了までタイガース戦が放送されています。翌朝ラジオをつければ、前日の試合内容が詳細に語られ、最後に男性局アナが六甲おろしを熱唱します。登校すると前日の試合結果によって担任の先生のご機嫌と宿題が変わります。こうした環境ですから大阪の男の子たちは自ずとトラキチ（熱狂的なタイガースファン）に育ちます。

子供の頃のタイガースはとても弱くダメトラと呼ばれていました。優勝は一生見られないと子供心に思っていました。このようなダメトラですが、これまでに4度のリーグ優勝を見ることができました。

1度目の優勝は1985年です。高校3年生の時でした。監督は、オールドファンからはショートでの華麗な守備から牛若丸の愛称でおなじみの吉田義男です。振り返りますと、4月には対巨人戦で榎原投手からバース、掛布、岡田のバックスクリーン3連発での勝利。5月には対広島戦で序盤7点差のビハインドゲームを逆転勝利するなど優勝を予感させるものがありました。リーグ優勝がかかった10月16日、神宮球場での対ヤクルト戦で勝ちか引き分けが優勝の条件でした。2点ビハインドで迎えた9回表にソロホームランと犠牲フライで追いついたのを見て何か神懸かっている今シーズンを象徴する試合だと感じたものです。

当時の日本シリーズは平日・デーゲームでした。授業中も試合の状況を知りたいのがトラキチです。今ならスマホで試合経過を逐一知ることができますが、その頃はそんな便利なツールはありません。小型携帯ラジオを胸ポケットに入れ、イヤホンを学生服の袖に通し、頬杖をついて授業を聞いている振りをして試合状況を把握していました。タイガースに点が入ると教室のあちらこちらで「よっしっ！」「よっしゃ！」という声が上がりましたが、先生のお咎めはありませんでした。おおらかな昭和の時代でした。

2度目の優勝は2003年です。15年で14回のBクラス、10回のリーグ最下位で「暗黒時代」と呼ばれる期間を挟んでのものでした。暗黒時代の原因は、前

回優勝時にケンタッキーの店に設置してあるカーネル・サンダース像をバースに見立てて胴上げし、道頓堀川に投げ込んだ「カーネル・サンダースの呪い」と言われています。この年は星野仙一監督による「血の入れ替え」（大量のトレード、中日時代にも同様の手法で優勝に導く）を断行し、ダイナマイト打線を擁しての優勝でした。

3度目の優勝は2005年です。優勝の最大の要因は中継ぎ・抑え投手の活躍でした。岡田彰布監督が確立した勝利の方程式「JFK」（ことジェフ・ウィリアムス（J）、藤川球児（F）、久保田智之（K））につないで勝利するスタイルです。6回までにリードしている場合の勝率は9割を超えていました。

余談ですが、この年の日本シリーズはロッテマリーンズに4タテを食らいました。4試合の総得点が「ロッテ33-4阪神」と完膚なきまでに叩きのめされました。これ以降、「334」に過敏になっています。コンビニでの支払いが334円ですとか、宿泊ホテルの部屋が334号室の時に動揺を隠しきれない人がいれば、それはタイガースファンです。

4度目の優勝は2023年です。第二次岡田政権です。前回の優勝から17シーズンでAクラス12回、2位8回と好成績でしたが、優勝を意識すると選手が萎縮してしまい、優勝を幾度となく逃していました。そこで監督は優勝という言葉で封印し「アレ」という言葉で表しました。選手もマスコミもリーグ優勝をするまでは「アレ」という言葉を用いています。戦い方は守り勝つ野球で、当たり前のことを当たり前にやり、各選手に役割を意識させ、一丸となって勝利を掴み取る野球です。飛び抜けて大活躍した選手はいません。MVPは村上頌樹投手が選ばれましたが、大竹耕太郎投手、近本光司選手、大山悠輔選手が選ばれていたとしても異論はないでしょう。チームは投手、野手ともに層が厚く年齢構成も若手を中心にバランスが良いです。今年の連覇はもちろんですが、タイガースの黄金期到来さえも予感させます。

関西には都市伝説があります。「タイガースの優勝を4度見ると人は一生を終える」と。果たして5度目の優勝をこの目で見るのでしょうか？